# 疑問

小野田　千恭

私立影山高校。この町の都会っぽい雰囲気から投げ出されたかのように、町の端っこにひっそりと佇む山。その山の中に建っている、総生徒数約二百人の小さな学校。最寄り駅から徒歩四十分。周りは森などの自然だらけで、町の賑やかな声や道を走る車の音すらほとんど聞こえない。

そんな影山高校に入学してから早一年半。私、野田椎名は、教室の一番窓側の後ろから二番目にある自分の席でぼーっと授業を聞き流していた。

（授業早く終わんないかな～）

勉強嫌いな私は、授業中ノートだけ適当にとってあとはずっとなにかしらで暇つぶしをしている。いつもなら本を読んだり落書きしたりするのだが、今持っている本は読み終わってるし、落書きしようにも今日はアイデアが浮かばない。

今は六時間目。暑くもなく寒くもない教室の温度に、どんよりとした曇り空。退屈な生物の授業。クラスの半分ぐらいが寝ていてもおかしくない環境だけど、このクラスを担当している佐藤先生は、寝てたり喋ってるところを見つかると当てられて答えなければいけなくなるので、クラスの大半は真面目に授業を聞いている（それでも数人寝てる人はいるけど）。

（うーん……）

少し真剣に考えていると、後ろからつつかれた。先生が黒板に向かっている隙をついて振り返ると、有が困ったような笑顔を浮かべていた。

「あーる、どうしたの？」

「どうしたのじゃないよしーちゃん。ちゃんと授業聞かないとダメだよ？」

「ちゃんと聞いてるよ～」

「ウソ。ぼーっとしてたでしょ」

「ちぇっ、わかっちゃうか」

後ろの席に座っている私の親友、横山有（私は「あーる」と呼んでいる）は、真面目で成績も良く、宿題や試験勉強などいつも助けてもらっている。しかもなぜか勘が鋭いので、ぼーっとしてるとすぐバレる。

「またテストで赤点取っちゃうよ？」

「佐藤先生の授業がつまらなすぎるのがいけないんだよ」

「誰の授業でもだいたいぼーっとしてるじゃん」

「だぁーってさぁ、どの授業もみーんな退屈じゃん。将来役に立つのかいまいちわかんないし。あーあ、早くあそこ行きたい～」

「まぁ気持ちは分かるけどね」すると

「おーい、椎名。後ろ向くなー。寝てる奴らも起きろー。赤点とっても知らんぞー。」

いつの間にかこちらを向いていた先生に注意された。

「むぅー。なんだよ赤点赤点って、みんなしてさー」

「ふふっ」

ふてくされながらも前を向く私に、あーるは小さく笑った。

一日の最後の授業の終わりを知らせるチャイムが響く。七時間目の国語の授業を担当する早坂先生はこのクラスの担任で、そのままＨＲをして帰らせてくれるので楽である。

「やっと終わった～」
ＨＲが終わり、部活にいく人や帰る人がわらわらと教室の外に出て行く。２人とも部活動には参加していない。本来ならそのまま家に帰るはずなのだが、
「しーちゃん、今日もあそこ行くよね？」
「当然！ずっと楽しみだったんだから」
そう言って荷物を持つと、私たちは人の流れに逆らうように校舎の出口とは反対方向に歩き出した。

この学校には旧校舎がある。百年近く前に建てられたらしく木造校舎でとても古い。
昔は生徒数が多くてこの校舎の教室も使っていたらしいが、今は理科室や美術室などの特別教室しか使われておらず、しかも新校舎から遠く薄暗いので授業の時以外人はほとんどいない。特に旧校舎の一番奥にある図書室は、生徒どころか先生すら近寄らない。中は結構広くて、ジャンルや年代を問わず様々な本が置いてあるのだが、木々に囲まれて日の光があまり入ってこない所為か薄暗く、気味が悪いと同級生たちが話していた。
この図書室の司書さんは二十代から三十代ぐらいの若い男の人で、その人にもいろいろ噂がある（「不老不死で学校が出来た当時からずっと図書室にいる」とか「実は幽霊なんだ」などの他愛ないものばかり）。だけどその人だって、普段はカウンターのところに座って寝ていることがほとんどで特に変わった人には見えない。
私と有はこの図書室をとても気に入っていて、授業が終わった後はほとんど毎日ここに来て放課後を過ごす。誰も来ないし、周りも大部分が森なので中に入ると外の音がほとんど聞こえない。とても静かで勉強に集中できるし、面白そうな本がたくさんあってわくわくする。
そしてもう一つ。私達がこの図書室を気に入ってる理由は、秘密の隠れ家があるのだ。隠れ家と言っても大したものではなく（と言うか偶然見つけただけだが）、単に大きな本棚がいくつか集まっているところに小さなテーブルと椅子が二つあるだけの場所である。
でも本棚が陰になってカウンターからも出入り口からも見えにくくなっているので、そこでなら、本来学校内では使ってはいけない携帯を使っても見つからないし、この辺の本棚には結構昔の本や誰かの落書きの紙が挟まってたりするので面白い。私達は司書の人を起こさないように図書室に入り、普通のテーブルで宿題をしてから隠れ家がで話しながら本を読むのが習慣になっていた。

その日も宿題を終わらせたあと、二人で本を読んでいた。一冊読み終わったので次に読む本を探していると、変なものを見つけた。それは何枚かの紙をホッチキスで留めた、手作りの本のようなものだった。
「あーる、これ何かな？」
「んー？」
本に熱中していた有は顔を上げ、私の方を見た。
「誰かの落書きじゃない？」
「それにしてはちょっと変なんだよねぇ……あっ、表紙みたいなのがある」
表紙（と思われるもの）には一言『疑問』とだけ書いてあって、書いた人の名前なども一切書かれていない。
すると、読んでいた本に栞を挟んだ有が近寄ってきて私の手元を覗き込んだ。

「ちょっと見てみようよ。面白そう」
「あーるこういうの好きだもんね。いいよ、見てみようか」
最初のページを開くと『はじめに』と書いてあり、国語の先生が書くようなとても丁寧な字で次のような文章が書かれていた。
『この本は、私が日頃思っている「疑問」を書き記したものです。疑問は問十三まであり、一問毎に見開き分の白紙ページがあるので、そこにその疑問についてあなたなりの答えを書いていただきたいです。誰かと相談してもかまいませんし、もちろん見るだけで書かなくてもかまいません。ですが、できるだけ書いていただけると有り難いです。また、この本は図書室から持ち出さないようお願いいたします。』
「スゴい丁寧な文章だね。どんな人が書いたんだろう？」
「何で図書室から持ち出しちゃいけないのかも気になるね。とりあえず見てみようか」

『問一、あなたが変えたいこと(もの)はなんですか？』
「疑問ってこういうのなんだね。もうちょっと簡単なやつかと思った」
「簡単なやつって？」
「将来の夢は～とか、この学校のこと好きですか～とか。まぁ聞いたところで『だから？』って感じだけど」
「確かにね～。あーるは変えたいこととかある？この日本を変えてみせる！みたいな」
「そんな壮大なのはちょっと……。うーん、強いて言うなら自分の性格かな」
「性格？あーるは別にそのままでいいと思うけど」
「私って余計に考え過ぎちゃうところがあるんだよね。深入りしすぎちゃうっていうのかな。考え込みやすいところを変えたい。しーちゃんはないの？」
「私もあーると同じで性格を変えたい。特に自分勝手でわがままな所とか」
「そんなこと無いと思うけど……」
「私結構わがままだよー。身内に年下がいなくて甘やかされてるから、いつでもどこでも自分のことばーっかりだし。ほら、次のやつ見よう」

『問二、あなたが欲しいものはなんですか？』
「学力。特に数学の」
「それ以上頭良くなってどうするのさ」
「テストの成績上位者の表に入ってない私が頭良いわけないでしょ」
「毎回ギリギリで入れない人が何を言うか。私なんて平均点すら越えないのに」
「しーちゃんは勉強サボるからでしょ。うーん、じゃあ菩薩メンタル」
「何それ？」
「菩薩みたいなメンタルのこと」
「そのまんまじゃん。もうちょい詳しく」
「えーっと。菩薩ってさ、自ら修行して悟りを開いた人でしょ？周りに流されたり自分の中の雑念に惑わされない、強い精神。そんなメンタルが欲しいなぁって」
「なるけどねぇ。私はいろいろあるなぁ、欲しいもの。行動力とか、演技力とか、冷静さとか」
「何で演技力も？」

「まぁいろいろとね」
「ふーん？次見てみようか」

『問三、あなたにとって辛いことはなんですか？』
「ほぼ毎日増え続ける宿題」
「即答……。毎日ちゃんとやらないからだよ」
「うぐっ、返す言葉もない……。まぁ宿題に限らず、やらなきゃいけないことばっかり増え続けてやりたいことがほとんどできないのはスゴく辛い」
「確かに。昼間は学校行って、家帰ったら宿題やったり授業の復習したりで、やりたいことってなかなかできないよね」
「そういえば、あーるの辛いことは？」
「まぁ、単純に大切な人が亡くなること、かな。友達とか家族とか」
「あぁ～なるほど」

『問四、「強さ」とはなんですか？』
「私は『精神的に強いこと』だと思うな。肉体的なものじゃなくて。私の憧れる菩薩メンタルだよ」
「アニメとかでよく出てくる『強さ』は違うんだ？」
「私的にはね。身体とか力とかが強くても、心が弱いと何にも出来ないと思うから」
「なるほどね～。私のもちょっと似てるけど、『何があっても自分の意志を曲げないこと』かな。意志を貫き通すのって結構大変だと思うから、それができる人は強い人だと思う」
「自分の意志を貫き通す、か……。確かに大変だよね。私も結構流されちゃうことあるし」
「うん。だから、子供の頃からの夢を追い続けて本当に叶えた人ってスゴいと思う」

『問五、「弱さ」とはなんですか？』
「『精神的に弱いこと』。まぁさっきの『強さ』のときと一緒かな。自身の感情が制御できないことは弱いことだと思う」
「それは結構納得。私は『自分自身を認められないこと』だと思う」
「どういうこと？」
「自分の悪い所も良い所もちゃんと受け止めて、悪い所は直す、良い所は伸ばす。ちゃんと認められないと、直すことも伸ばすことも出来ないから、弱いまんまなんじゃないかなって」
「『認められない』か……。じゃあ私は弱いかな」
「えっ、何が？」
「何でもないよ。えーっと次は……」

『問六、人の命を奪う行為は全て罪ですか？』
「奪って良い命は無いよ」
「……わりと場合による気がする」
「じゃああーるは、理由さえあれば人を殺してもいいって思うの？」
「そこまでは言わないけどさ、例えば戦争をしていた時代は、敵を殺せば殺すほど英雄視される

でしょう？でも殺してる相手だって人間なんだよ」
「……」
「連続殺人鬼を正当防衛で銃殺した警官は罪になる？ようするにそう言うことだよ」
「そう…だね……」
「……ちょっと責めるような言い方しちゃった。ゴメン」
「大丈夫。あーるの言ってることは間違ってはないと思うし。この問題は、私たちみたいな普通の高校生が気安く話していいような軽い話じゃないね。次のやつ見よっか」

『問七、自分の家庭について肯定的ですか？否定的ですか？』
「わりと否定的」
「何で？仲良さそうなのに」
「私の家族を見てると何を信じればいいのかわからなくなってくるんだよ。時と場合によって言ってることとか考え方とかバラバラで、その人の印象そのものが変わって見えちゃうくらいなんだよね。あーるは？」
「半々かな。才能を伸ばすには向かないけど、居心地は良いよ」
「……？どういうこと？」
「一緒に住んでみたらわかるかもね。お勧めはしないけど」

『問八、自分の人生について肯定的ですか？否定的ですか？』
「私は否定的。自分の考えてることを伝えきれなくて私自身が悪者になるパターンばかり経験しているから」
「何でそんなことになるのさ？」
「いろいろあるんだよ。私が弱虫だからそうなっちゃうんだ」
「ふーん。私は肯定的なような否定的なようなって感じかな。大切な友達には出会えたけど、あの家庭環境に生まれたのが良かったのかと思うと微妙」
「さっき言ってた『何を信じればいいかわからなくなる』ってやつ？」
「まぁね。でもこの学校に通わせてくれて、大切な友達に出会わせてくれたことは感謝してるかな」

『問九、あなたは何のために生きていますか？』
「『生きるために生きている』……かな」
「どういうこと？」
「生きてる意味を見つけるために生きてる」
「『生きてる意味を見つけるために』かぁ、なんか、難しいな……」
「しーちゃんはどうなの？」
「大切な人に会うため。友達と話すためにはちゃんと生きてなきゃいけないからね。私が生きて学校に来てるのは、あーるに会うためだよ」
「毎日学校に会いに来るぐらいの価値って私にあるの？」
「なーに言ってんのさ。あーると話してるとスゴく楽しいよ」
「…ありがとう」

『問十、あなたの思う「世界」とは何ですか？』
「世界、かぁ……」
「じゃあ私から言うね。『目で見たり耳で聞いたり鼻でかいだり舌や肌で感じるもの全て』」
『知らないことだらけの場所』
「……」
「……」
「真逆！」
「真逆だね」
「えぇ～自分自身が知ってることが自分の世界だと思ったんだけどな～」
「だって謎が無ければただの箱庭じゃない。自分の知らないこと、自分が見たこと無いものこそが、私は世界だと思う」
「そういう見方もあるのか。あーるはやっぱ大人だね～。びっくりしちゃった」

『問十一、自分の「両親」についてどう思いますか？』
「私の母親は良い大人だと思うけど、ポジティブ過ぎて相談には向かないかな。悩みなんかご飯……いや、お菓子か。お菓子にのっけて食べちゃうと思うよ」
「なんかスゴいお母さんだね。お父さんは？」
「父親は少し怒りっぽいこと意外は良いお父さん。でもこっちも相談には向かないね。感情の起伏が夫婦揃ってジェットコースターみたいなんだ」
「はぁ」
「しーちゃんの両親は？さっきの話聞いてるとあんまり良い人達って感じしないけど」
「母親はお金のことばっかり言っててちょっと気に食わない。父親は、娘にばかりえこひいきするのはやめていただきたい、かな」
「……？」
「私のお母さん、いつも『これこれにいくら払ってると思ってるんだ』とか『学費がどうのこうの』とかお金のことばっかり言ってきて、説教もいつの間にかそういう話に切り替わっていくのが大半なんだよ。お父さんは、兄ちゃんには冷たいくせに私のことは甘やかす。まぁお父さんとはもともと仲良いけど、あの態度の差はえこひいきにしか見えない」
「ふーん……」

『問十二、自分の「兄弟(姉妹)」についてどう思いますか？』
「あーるは確か妹と弟がいるんだよね？どんな感じ？」
「私の妹は芯が強いから、たぶん一人でマイペースに強く生きていくと思う。弟は何故か半径一メートル以内に寄ってこない」
「えっ、何で？弟に何かしたの？」
「何もしてないよ。でもなぜか近寄ってこないの。しーちゃんはお兄さんがいるんだよね？」
「弟くんに何があったのかスゴい気になるんだけど……。私の兄ちゃんはいろんな考え方を教えてくれる人だよ」
「相談に乗ってくれるんだ。優しいお兄さんだね」

「相談って感じでもないんだけどね。兄ちゃんと話してるといろんな意見とか考え方が聞けて面白いよ。正しいかどうかはわからないけどね」
「そりゃあ個人の感覚とかもあるしね。あっ、次で最後だ」

『問十三、あなたにとって大切なものは何ですか？』
「じゃあしーちゃんから」
「いやいや、あーるからでいいよ」
「えぇ～なんか恥ずかしい」
「私まだ決めきれてないもん」「うー、わかったよ。私『を認識して、大切にしてくれている人』。はい、しーちゃんの番」
「うーん……『個性』かな？」
「友達とか家族は違うの？」
「いやむしろ大切だから言うまでもない、と言うか。言い過ぎると逆に安っぽくなっちゃうかなって。自分の意志をしっかり持って、周りに流されず、自分らしくあり続けるっていう『個性』が、今の私にとっては大切なんじゃないかなって」
「なるほどー」
「あーるのはどういうこと？」
「なんか私を大切にしてくれる人は私も大切にしなきゃなって。忠誠心みたいな？恩と借りはキッチリ返すし、困っていたらなるべく助ける」
「そんな堅っ苦しい言い方しなくても、素直に家族とか友達が大切だって言えばいいのに～」
「だから恥ずかしいって言ったの！もぅ……」
「あーる恥ずかしがってる～かわいい～」
「かわいくない！で、これで一通り全部見たかな？」
「そーだね。意見言い合ってただけで全く書いてないけど」
「そういえば忘れてた。でも自分の意見をちゃんと言い合うって結構楽しいんだね」
「ね～。すっかり夢中になってたよ。あーるの意見も面白かったし」
「しーちゃんのも私のと全然違くてビックリした」
「なんか、前よりお互いのことよく知れた気がする」
「確かに。楽しかった」
「書くのどうしよう？」
「うーん、一人一人書いてこうか」
「そうだね～」
筆箱からシャーペンを取り出し、有がその本に書き始めようとしたとき、スピーカーから音楽が流れ出した。
《もうすぐ下校時間の十八時半です。校内に残っている生徒は速やかに下校してください》
「えっ!?もうそんな時間!?」
「全然気付かなかった。これどうしよう……」
有はテーブルの上にある開きっぱなしの本を見た。
製作者の『疑問』が詰まった本。この本を見つけたことでお互いのことをもっと知ることができた。こんな中途半端なままで忘れ去ってしまうのは、なんだか寂しい。

「うーん、じゃあ明日の放課後書こうか」
「そうだね。どうせ明日もここ来るだろうし。元の場所に仕舞っとこう」
「仕舞った場所、忘れないようにしなきゃね」
そう言って、私は本棚にその本を戻した。
「ふぁ～あ、まだいるんですか？下校時間ですよ～。もう出てくださ～い」
眠そうな司書さんの声が聞こえてきた。下校時間の音楽が鳴ると起きて、誰かが残っていたりしないか確かめるのだ。
私と有はお互いの顔を見てからニコッと笑い、
「は～い。今出まーす」
と元気よく返事をして、出口に向かった。

翌日、私達はいつものように図書館に来た。普通の机で宿題を終わらせ、秘密基地で本を読む。一冊読み終わった私が本を閉じて席を立つと、一区切りついたのか有も本に栞を挟んで伸びをしているところだった。
「相変わらず分厚い本読んでるね～」
「長い話の方が物語に浸れるから。しーちゃんはもう一冊読み終わったの？」
「私はどちらかと言うと短い話いろいろ読む方が好きだからさ。えーっと次は……」
読み終わった本をしまい、次の本を探していると、
「……ん？」
不思議な感覚が襲ってきた。
「どうかしたの？」
本棚の前で固まったまま動かない私をあーるがつついた。
「何か変なものでも見つけたの？」
「いや、なんか今日やらなきゃいけないことがあった気がするんだよね。宿題とかそういうんじゃなくて、『二人で明日これやろう』みたいな……」
「そんなのあったかなぁ……。『一緒にこの本読もう』とかじゃないの？」
「うーん、確か本棚のこのあたりで話してた気がするんだけど……」
何か思い出すヒントにならないかと本棚を見てみるが、特に気になる物もないし、何も思い出せない。
「まぁ思い出したらでいいや。あっ、これ面白そう！」
私が本を取ろうとしたとき、
「お二人とも、いつもここにいたのですね。どうりでカウンターから見えないわけだ」
秘密基地の入口になっている所から司書さんが覗き込んでいた。
「わっ、びっくりした。いつからそこに？」
「珍しいですね、下校時間の音楽より前に起きてるなんて」
「ははは、今日は少しやることがありましてね。そうそう、夕方から夜中にかけて大雨になるそうですので、早めに帰った方が良いですよ」
「そうなんですか!?しーちゃん、今日は帰ろう」
「えぇ～……。まぁいいや、さすがに大雨の中帰りたくはないし。てか傘持ってない。あーる、帰るとき傘に入れてくれる？」

「はーい。ありがとうございます、わざわざ教えてくれて」
「いえいえ。お二人が毎日この図書館に来てくださっていること、僕はとっても嬉しく思っているんですよ。こんな薄暗いところに来る人なんていませんからね。この図書館も喜んでいますよ」
「私は暗くて人がいない方が好きだから、この図書館の雰囲気結構好きですよ〜。なんかワクワクするし……って、司書さん。それ、何持ってるんですか？」
私は司書さんが右手に持っている物を指差した。何枚かの紙を本のように束ねただけのものだが、私は何故か気になってしまった。
「ああ、これですか？カウンターの近くの本棚に入っていたんです。ただ意味のない落書きかと思ったのですが、なかなか興味深いことが書いてありましてね」
「へぇ〜、面白そう！見ても良いですか？」
「しーちゃん、そろそろ帰らないと本降りになっちゃうよ？」
「でも……」
「まぁ、これはまた次の機会に。まだ雨も小降りですから、今のうちにお帰りください」
「はーい。そのかわり明日、絶対それ見せてくださいね！」
「もちろん。それではまた明日」
「さようなら〜」
「また明日〜」
司書さんに手を振りながら、私たちは図書館を出た。旧校舎を出た私たちは、二人で一本の傘に入って駅へと向かった。